

2018年6月28日

立教大学国際学術研究交流制度
2018年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	異文化コミュニケーション学部・教授
	氏名	新野 守広
受入学部・研究科・研究所		異文化コミュニケーション学部
招へい 研究員	所属・職	Mitglied, Literature, Academy of Arts 所属機関所在国：ドイツ
	氏名	Dea Loher
招へい期間		2018年5月8日～2018年5月31日（24日間）
研究経費		691,250円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2018年5月8日	来日
2018年5月10日	ドイツ語圏の現代演劇についての研究討議、新野研究室、5名
2018年5月14日	ワークショップ①「現代社会における演劇の役割について」新野研究室、10名
2018年5月20日	劇評講座「劇作家デア・ローアー氏を迎えて」、座・高円寺、55名
2018年5月22日	大学院生への研究指導、5202教室
2018年5月24日	公開講演会「演劇の実験性はどこに向かうのかー劇作家デア・ローアーを迎えて」、1202教室、56名
2018年5月28日	世界演劇講座「劇作家デア・ローアーを迎えて」、アイホール、25名
2018年5月29日	ワークショップ②「現代社会における演劇の役割について」新野研究室、12名
2018年5月31日	離日

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

1992年に『オルガの部屋』を発表して劇作家としてデビューしたローアー氏は、『タトゥー』（92年）と『リバイアサン』（93年）で演劇専門誌テアター・ホイテの年間最優秀新人劇作家に選ばれたのを皮切りに、93年ミュールハイム市ゲーテ賞（『タトゥー』）と98年劇作家賞（『アダム・ガイスト』）、2006年ブレヒト賞、2008年『最後の炎』で再びミュールハイム市劇作家賞、さらにはテアター・ホイテ誌年間最優秀劇作家に選ばれ、2009年にはベルリン文学賞、2017年にはヨーゼフ・ブライトバッハ賞も受賞するなど、ドイツ語圏を代表する劇作家として活躍している。

日本でも彼女の劇作家活動に対する関心は高く、『タトゥー』（2009年新国立劇場、岡田利規演出）、『最後の炎』（2011年エイチエムピー・シアターカンパニー、笠井友仁演出。2012年テラ・アーツ・ファクトリー、林英樹演出。2018年4月文学座アトリエ、生田みゆき演出）、『無実』（2014年東京演劇アンサンブル、公家義徳演出）、『黒い湖のほとりで』（2015年エレベーター企画、外輪能隆演出）、『泥棒たち』（2017年東京演劇アンサンブル、公家義徳演出）が上演されてきた。

このようにドイツ語圏で活躍し、かつ日本の演劇人も高い関心を示す劇作家ローアー氏を招聘するにあたっては、異文化コミュニケーション学部の新野守広が中心となり、教員と院生の研究会を組織した。研究会はローアー氏の滞在中、研究討議や公開講演会、ならびにワークショップを開催した。

研究討議ではドイツ語圏の現代演劇についてローアー氏に発表してもらい、それをもとに議論を交わした。我々日本側が知る機会の少ないドイツ語圏の演劇事情に関して、ベルリンを軸にしながらさまざまな角度から光を当てるローアー氏の発表を通して、彼女の作品の背景となる社会事情に触れることができたことは得難い経験だった。また、ドイツ語圏に関心を持つ学部学生にも呼び掛けて開催したワークショップでは、演劇を使うコミュニケーションを試み、学生たちにとって貴重な体験となった。

公開講演会「演劇の実験性はどこに向かうのかー劇作家デア・ローアーを迎えて」は、日本側から東京演劇アンサンブルの演出家公家義徳氏（『無実』、『泥棒たち』の演出家）、テラ・アーツ・ファクトリーの演出家林英樹氏（『最後の炎』の演出家）、ローアー氏の戯曲の翻訳者である上智大の三輪玲子氏の3名をゲストに招き、ドイツと日本それぞれの演劇事情をクロスするトークを目指した。学内の教員や学生をはじめ、学外の演劇関係者などの60名程度の来場者があり、冷戦終焉後のドイツと日本のそれぞれの社会を演劇がどのように描いてきたか、そして今後の問題点はなにかについて、ローアー氏、公家氏、林氏、三輪氏の発表、および聴講者を交えての質疑応答を通して、知見を深めることが出来た。

ローアー氏は、実験精神あふれる劇作法でヨーロッパ内外に幅広い反響を呼んでいる。以前から日本にも興味を持ち、人生のすべてを会社に捧げるサラリーマンを描く短編『サムライ』や赤瀬川源平のトマソン芸術に言及した『泥棒たち』などのように、表現の素材として日本的なものを使ってきた。このようなローアー氏に、短期とはいえ、日本滞在の機会を提供できたことは、立教大学の教員・院生の研究活動と学部学生への教育活動にとって大いに刺激となったばかりだけでなく、日本とドイツの演劇人が相互理解を深める上でも貴重な足がかりとなった。このような機会が実現できたことに心から感謝したい。

(特記事項) 本学との学術協定(学部間・研究所等間を含む)の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。